

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110 - 1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

夢中の途中

須藤 岳人

「岳人は、遊びを極めなさい」
二十代の終わり頃、宴席で里見理事長からいただいた言葉が、今もずっと頭に残っている。遊びを極めるとは……。

今や廃線の憂き目の久留里線が通る君津市久留里という田舎町で育った。三人兄弟の末っ子。いつも兄たちの背中を追いかけていた。三人目ともなると親も諦めがついたようで、あれこれ言われず伸び伸び育てられた。勉強が嫌いで、「教科書を開くと頭が痛くなる」という都合の良い持病を抱えていたので、母親も早い段階で「好きなことをやればいい」と覚悟を決めてくれた。小学校二年生で野球にのめり込み、仲間もたくさんできた。中学も勉強はせず野球三昧。兄の進路では口論していた父親もせつかなら強豪校でやりたいと言った私に「好きなところがあるならしようがない」と一貫して諦めの姿勢。兄二人と同じ高校なら受かるだろうと高を括っていたが、担任からは「あなたは無理よ」と言われ続けた。見事に試験の山が当たったか、兄たちの素行が良かったおかげかはわからないが、無事に入学でき、これで大学受験も

も甲子園にはあと一步届かなかったが、当時の最高成績を更新できた。



その頃、身長は百六十五センチ。野球もここまでかな、大学では体格を言い訳にできない一対一のスポーツに真剣に挑みたいと、キックボクシング部のドアを叩いた。格闘技ブームに乗ったミーハーが集結し、同期は二十名入部した。当然ここでも上下関係は厳しかった。兎跳びなんてまどろっこしいやり方ではなく、「スパーやろうか」と誘われてリングでボコボコにされ、教わってもいないハイキックでダウンを取られ、ボディで悶絶した。その後に必ず「殴られた分だけ強くなるから」と言われる。ほんとかい？合宿では起き抜けから走り続け、メシを食ったら練習の繰り返し。高校時代の恩師の話ならあの時以上辛いことはないはずだが……結構辛いぞ。でも逃げてはいけない。最終日、尊敬するOBから「辛いけど頑張れ。続けることが大切。やり切れば必ず良い就職先に巡り会える。学生チャンピオンになれ」と言葉をかけられ、自分なりに食らい続けた。地獄の合宿を終えて見回すと、同期は二人になっていた。「今年の新人は根性ねーな」と息巻く先輩と目が合って、スパーでボコボコ

に。その繰り返しで確かに強くなり、大学三年秋、目標にしていた全日本フライ級の学生チャンピオンのベルトを獲得、大きな目標を達成できた。

縁あって（得意のコネで）、佑啓会に入職した。（就職の話は百二十号に書いたので端折る）「自分のようにこの業界のことを知らない人が多いはず。もっと多くの人に知ってほしい」と、生意気な志を持ってはいたが、福祉を知らないどころか、スポーツしかしてこなかった世間知らずのろくでなし。入職後もたくさん迷惑をかけ、三股専務には宴席でよく泣かされた。高校時代の恩師の言葉を思い出す。あれ？結構辛いぞ（笑）。

冗談はさておき、背伸びをしているとすぐに見透かされ、「客観的に自分を見ている。もう一人の自分“を作れ”と諭してくださった言葉は今でも大事にしている。一方で直属の施設長だった行場課長は、いつも温かくやりたいことを自由にやらせてくれた。利用者を真ん中に置いて考える。週七回？の居酒屋でも、常に「どういう支援をしていこうか」と仕事の話で熱くなる。そんな意味ある宴席を自分も若者たちと重ねたい。佑啓会の父と母、そしてたくさん兄、姉、弟、妹。この出会いのおかげで、あつという間の充実した二十年を過ごさせていたのだ。

現場以外にも職員採用を担うプロジェクトチームや広報委員会に長く携わり、まさに自分がやりたかった仕事をさせていただいている。学生の前で直接話をする機会には、自分の恵まれた環境を堂々と自慢する。長く勤めていれば必

ずやりたい仕事に辿り着く。転職は今や当たり前、セカンドキャリアなんて言葉もよく耳にするが、続けることで見えるものや得るものが必ずある。それは螺旋階段を登っていく感覚。同じ物を見るにしても、一年目、十年目、四十年目、それぞれ見える景色は違うだろう。

「これ以上に辛いことはない」正直、そんなことはなかった。生きていれば、辛いことも悲しいこともある。それを乗り越えられたのは、多くの仲間の存在があったからだ。「続けること」が自分の長所だと思っていたが、自分が優れているからではない。ただただ、周りの人に恵まれたから続けてこられたのだ。

先日、法人内の施設長会議が行われた。社会や地域のニーズに応えるため、今後の展望を語る里見理事長の眼差しと熱量は、今も昔も全く変わらない。聴いているだけで、いつだってワクワクする。この四月、ふる里学舎きせつ館の施設長を拝命した。組織に貢献すべく、意気込んで分厚い福祉制度のハンドブックを開いてみたが、やっぱりあの都合の良い持病（頭痛）が騒ぎ出す。そんな時は、グラウンドへ飛び出して「ユーケーズ」の子どもたちに会いに行こう。ユーケーズは、法人の野球部が地域の子どもたちに野球を教える場として立ち上げた少年野球チーム。監督を任せていただいているが、これがとにかく楽しい。夢中で白球を追う子どもたちの姿に、かつて泥だらけだった自分の原点が鮮明に重なる。この活動こそ私にとっての「本気の遊び」であり、原動力になっている。

結局、私は「人」が大好きだ。

障害福祉の本質とは、まさに人と人との繋がりがそのもの。利用者、ご家族、関係機関。すべての関わりが面白く、だからこそ、この仕事は私の天職だと胸を張って言える。何でもAIが答えを教えてくれる便利な時代になった。しかし、マニュアルには決して載らない理屈を超えた「心の機微（きび）」の中にこそ、本当に大切なものがある。それを教えてくれるのは、いつだって目の前の「人」の笑顔や涙だと思う。

ふと、頭をよぎる。「岳人は、遊びを極めなさい」あの言葉の真意が、今なら分かる気がする。遊びだけではなく、寝食を忘れて熱中し、目の前のことに向き合う。その「本気」を極めた先にしか、見えない景色がある。AIにはできない、人間同士の熱い繋がりがあつて見える場所があるはずだ。これまで登ってきた螺旋階段はどこまで続くのかわからないが、大切な仲間と共にまた一歩ずつ登り続けよう。（ふる里学舎きせつ館 施設長）



青葉台ユーケーズの子どもたち

学校生活を終えて

高橋 利恵

美羽は今年、支援学校高等部を卒業し、四月からふる里学舎浦安ディセンターの就労継続支援B型でお世話になっていきます。中学一年の時に「ふる里学舎浦安」がオープンし、その頃からデイサービスや校外実習などで継続的にお世話になってきました。



今回、機関紙への掲載のお話をいただき、美羽は「恥ずかしい」という理由から反対していましたが、学校生活が終わり、これまでの歩みを振り返る良い機会になると考え、引き受けることにいたしました。

主人の転勤に伴い、美羽が生まれてから三年ごとに引っ越しを繰り返してきました。小学校低学年の頃に発達検査を受け、知的障害と診断されました。診断名がついたことで、周囲と比べるのではなく、この子のペースでやっていこうと思えるようになりました。

小学校は浦安市の支援学級に在籍しました。普通級との交流は行事のみで大半を支援学級で過ごしました。先生やお友達に恵まれ、学校を休むのを嫌がるほど楽しく通っていました。四年生の時に広島へ転校しました。四年生でこのままでは真逆の学校生活が待っていました。支援学級に在籍していても普通級で授業を受けるのが一般的で、多くの時間を普通級で過ごすことになりました。転校して間もなく「学校、行かないとダメ？」と言われた時には親の都合で転校させたことを深く後悔しま

した。教員不足を理由に、普通級への移動は一人で行い、学力に合わない教科書で授業を受けることもあり、ノートには何度も書き直した漢字の跡が残っていました。浦安と比べ、地域や学校、担任による支援の差があまりにも大きく、「もう少し配慮してほしい」と思うことはわがままなのかと悩みました。担任に思いを伝える自分がクレイマーのように感じられ辛い思いをしたこともあり、そのような中でも、担任に恵まれた年もあり無事に卒業することができました。

浦安市に戻り、小学校時代のお友達とともに中学校生活が始まりました。放課後はふる里学舎で同級生や先輩と過ごし、「実習生の人が来たよ」「小さい子と遊んだ」など、いろんな人と触れ合う機会がありました。当時はふる里学舎が大好きでロゴをスタッフの方に印刷していただき連絡帳に貼っていたこともあり、You Tubeもこまめにチェックしており、理事長の名前をフルネームで覚えていたことには驚かされ、誰よりも『ふる里愛』を感じました。

支援学校高等部に入学後は、しいたけ班や農耕班など屋外での作業も経験しました。慣れない作業に対しても、前向きに取り組む、筋肉痛になりながらも続けていました。



学校やデイサービスでは比較的手のかからない様子ですが、家では甘えが見られ、外での様子との違いに周囲が驚くこともあります。こだわりの強く、思い通りにならないと癪を起すことがあり、感情を抑えきれずに携帯やタブレットを壊してしまったこともあり、本人も、

物を投げるとどうなるかわかっていてもイライラを抑えられないと話しています。感情のコントロールについては、引き続き課題だと感じています。

ふる里学舎での就労が始まり、パンの成型に取り組んでいます。ふる里のパンを週五おやつで食べており、週末も買いに行きたいと言うほど気に入っています。特にチョコナッツデニッシュがお気に入りです。

時計が苦手、時間を意識せずに注意されることもあるようです。美羽は観察力が高いので、他の利用者さんの良い行動を見て、少しずつマネしながら動けるようになってほしいです。仕事なので大変なこともあります。スタッフの方々に助けていただきながら充実した生活を送っていければと願っております。

（ふる里学舎浦安 保護者）

新人挨拶

太田 恵悟

新人職員を代表して、ご挨拶させていただきます。ふる里学舎市原、園芸科に配属となりました太田恵悟です。本日は私ども新人職員のため盛大な辞令交付式を開いていただき誠にありがとうございます。新人職員を代表し、心より御礼申し上げます。私どもは、晴れて佐啓会の一員になったことを心から光栄に思っております。

私は大学四年間、焼肉店でアルバイトをしておりました。私はそこで出会った店長を尊敬しています。店長を一言で表すならとにかく丁寧な人です。物の扱い方、人との接し方その全てが丁寧で優しさに溢れていました。そんな店長から卒業の際にある言葉をいただきました。それが「一燈照隅（いっとうしょうぐう）」という四字熟語です。この言葉には大きなことを成し遂げようと焦らなくていい、自分の立っている場所、その小さな隅を温かく照らせるような存在になること、という意味が込

められています。私はこの言葉を体現できるように社会人を目指します。その為にも、まずは目の前の一つひとつの業務に真摯に向き合い、自分のできることを着実に積み重ねてまいります。



私たちは先輩方に負けないくらい仕事に真摯に向き合っています。まだまだ未熟ではございますが、先輩方にご指導をいただきながら成長していきたいと考えております。何卒ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。簡単ではございますが、新人職員代表の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

（ふる里学舎 支援員）

万感の想い

鵜野 保彦

本年度、ある兄弟が佐啓会の職員として仲間入りをしました。

二人との出会いは、ふる里学舎千倉が開所する直前の平成二十八年三月。児童相談所からの依頼でやってきました。兄、龍樹さんは小学四年生、弟の龍馬さんは小学二年生、複雑な環境で育ってきた二人の生活が始まって十年。振り返れば、本当にいろいろなことがありました。優しい性格だからこそ周りに影響されがちな龍樹さん。職員のそばに

いつもくっついて離れられずにいた、甘えん坊の龍馬さん。一緒に生活をする中で心も身体も成長し、いつしか先輩や職員にも頼られる存在になりました。

ある時二人から真剣な眼差しで「佐啓会の職員になりたい」と相談がありました。もちろん簡単な事ではありませんが、法人内の関係部署とも協議をして彼らの就活がスタート。一生懸命履歴書を書き、緊張の面持ちで面接に臨みました。働く意気込みを質問されると「今まで支えてくれた職員に、感謝の気持ちで働きたい」と答えたそうです。彼らの十年が思い起こされ胸がいっぱいになりました。晴れて採用となり、今ではグループホーム千倉で暮らしながら、パン工房で共に汗を流しています。



鵜野主任を挟んで笑顔の二人
（左）龍馬さん（右）龍樹さん

利用者から職員へと形は変わりましたが、思いは変わらず、これからも共に働く仲間として二人の成長を支え、見守っていききたい。

（ふる里学舎千倉 主任）

ふる里学舎千倉の開所と共に成長を重ねてこられた落合龍馬さん。安房特別支援学校高等部を卒業し、今年度六月より佐啓会の職員として入社されました。施設と共に歩んできた落合さんの新たな門出を祝し、ここに彼の卒業文集を掲載いたします。

学校での思い出は忘れない

落合 龍馬

十一年間の安房特別支援学校の生活。はじめは早く卒業したいと思っていたが、今もその気持ちは変わらない。それは自分のやりたい仕事に出会えたことと、兄と一緒に生活をしていくことが楽しみだからだ。今まで支えてくださりありがとうございました。



佐啓会の採用担当者3名が採用の裏話まで
ざっくばらんに語りつくします！
後半動画も是非ご視聴下さい！

佑Tube



編集後記

新年度が始まり早くも三ヶ月、三月に卒業したばかりの四十名の新たな仲間を迎えました。最初はガチガチに緊張していた彼らも、今では顔つきからも自信が伺えるようになりました。初々しい緊張から、一歩踏み出した頼もしさへ。新人職員のフレッシュな空気と共に、佐啓一三六号をお届けします。

（支援員 栗川克明）